The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	心理臨床における“わたし”概念の拡大 : 自我と「自己」から＜わたし＞へ
Author(s)	二宮, 幸大
Citation	大阪大学教育学年報. 2018, 23, p. 67-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

心理臨床における“わたし”概念の拡大
―自我と「自己」から＜わたし＞へ―

二　宮　幸　大

【要旨】

心理療法において、セラピストがどのような支援・治療を行うかには、“わたし”というものの捉え方が本質なこととして関わっている。本論では、まず、自我と内なる他者との関係を含めたものを「自己」、「自己」と外なる他者との関係までも含んだ意識、あるいは体験の場として＜わたし＞を定義した。次に、自我や自己に関する先行概念との比較研究を行い、＜わたし＞の性質について述べた。すなわち、＜わたし＞においては、現実的な意味とその人にとっての意味とが重なって体験されること、置かれている関係に転機が訪れるたびに、＜わたし＞は脱構成と再構成を繰り返すこと、それは潜在的な癒しの可能性が経験可能なものになる場であることである。心理療法の場においては、セラピストが＜わたし＞という意識の場に開かれ、＜わたし＞という場を整えること、クライエントの＜わたし＞を見守ることが求められ、クライエントにおいては、自我よりも大きなもの、あるいは、自分が依拠している関係に触れることが重要であろうと考察した。
【キーワード】＜わたし＞、関係、外なる他者

はじめに

心理臨床においては、クライエントとセラピストが共に、クライエントの抱える苦しみについて考え、クライエントがその苦しみに対していかに生きるかを扱っていると筆者は考えている。セラピストにとってそれは、クライエントが生きる世界に対する“わたし”のあり方を紡ぎあげてゆくプロセスの支援である。その支援観・治療観の前提には、こころ、自我やわたしといったものをどのように捉えるかということがあるだろう。この観点から本論では、まず筆者の考える＜わたし＞について述べ、これと先行する自我論・自己論との比較研究を行う。その後、セラピスト-クライエントという非対称な関係において、それぞれが＜わたし＞というものをどのように理解・体験することが重要と考えられるかについて述べる。

1. ＜わたし＞という意識・あり方

私たちの＜わたし＞という意識は、それまで生きてきた歴史の中で、その都度どのような物事に触れ、何を感じ、考えてきたかという経験と、今その時々においてどのようなことを意識しているか、どのような物事に意識が開かれているかということの交差点において成立していると筆者は考えている。そこには、行為者・経験者としての私と私が見聞きし、触れ、関わってきた他者―人、もの、こと―全てが含まれており、本論では、その総体を＜わたし＞という意識として捉えることを提起したい。

しかし、一言で“わたし”と言っても、さまざまな水準あるいは範疇があると考えられるので、まずはそれについて述べる。ある人が「私」と言うとき、それはある種の広がりを持っている。多くの場合、その意

味の重きは、例えば“佐藤何某”といった名前をもった人格としての私に置かれていると思われる。一般に自我と呼ばれるものが指しているのは、「私」のこの部分だろう。さらにこの「私」には、自我とは異なるものでありながら内側からその人の自我に影響を及ぼすこころの部分があり、深層心理学はこれを無意識と名づけた。われわれが普段、“私は、本当はどうしたいのだろう”とか“私の本当の気持ち”と言うときには、人によって程度の差こそあれ、この部分も含めたものとして「私」が捉えられている。ただ、無意識といっても、厳密にはFreud, S.が考えた個人的無意識と、Jung, C, G.が考えた集合的無意識とがあり、それによってこころというものの範疇は異なるが、それは後で触れる。ここでは大まかに無意識として括っておき、自我と無意識を合わせたこころ全体としての「私」を「自己」と呼ぶことにする。「自己」は、自我と、内的対象・内的世界といわれる「私」の心の中の対象・世界とをその範疇とするのに対して、＜わたし＞はさらに、外的対象・世界、及びそれらとの関係、すなわち「自己」の外側にあるものも含んでいる。「自己」の外側まで＜わたし＞に含めるというのは、奇異な考えに思われるかもしれないが、普段のわれわれの素朴な体験はこの領域にまで広がっているはずである。例えば、人から何かを言われたそのとき、その人の発言を聞いて、我々の内側にある脳や神経が反応したために腹が立っているとは中々感じないだろうし、内なる迫害者をその人に重ねているために怖いとは感じないだろう。もちろん、僅かであれ時間が経つと、そのように考え、理解することはできるし、その妥当性を否定するつもりはない。重要なのは、われがものごとを体験しているまさにそのときにおいては、本人にとって「自己」の内側、外側にある様々なものごとが結びついて経験されるということである。そして経験した本人にとってそれは、リアリティのある“わたし”のことである。ここにおいて、“わたし”は自我や「自己」の範囲に留まらず、様々なものごととネットワークのような繋がりや拡がりとして体験されていると考えられる。この「自己」も、その外側をも含めた“わたし”という意識を本論では＜わたし＞と呼ぶ。このように、自我としての「私」、「自己」としての「私」、それらの外側にまで拡がる＜わたし＞というように異なる水準、範疇の“わたし”が考えられる。図１に筆者の考える＜わたし＞のイメージを示す。私／自我と表記したものが自我としての「私」である。それは、その都度無意識から自我のもとへと訪れる様々な内なる他者たちと関わりを持ち、全体として「自己」となっている。この「自己」はさらに、外側にいる様々な他者や物事たち―それが人である場合はその人の中に内なる他者との関係をもつ―と関わりを持っている。図１においては、内なる他者も外なる他者も共に一つのみを描いているが、実際には複数あり、しかもその都度関わりを持つ他者は変わってゆくので、それらとの関係は網の目のように拡がっている。「自己」はこれらの他者との関係を持つことで、そこに＜わたし＞という意識・経験の場を開く。「自己」や外なる他者、＜わたし＞が点線で示してあるのは、それが意識されるときには全体としてある種の一貫性をもっている一方で、そのときの関係によってその輪郭が変化することを示している。

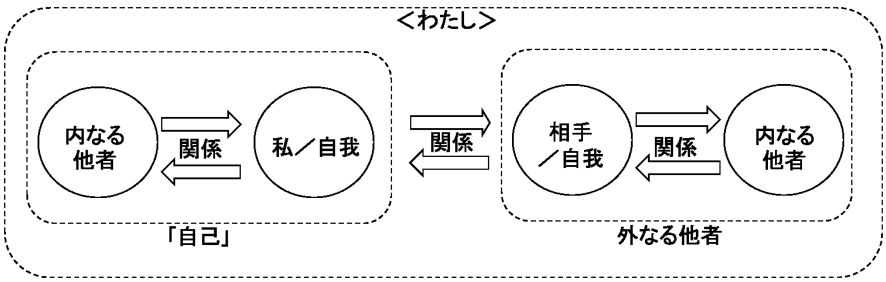

図１　＜わたし＞のイメージ

2. 比較研究

ここまでで、筆者の考える＜わたし＞の大枠を示してきた。次に、先行研究との比較を通じて、＜わたし＞の性質について述べてゆく。

2－1　漂泊自我

老松（1997）は、ヨーロッパで誕生した深層心理学における自我概念は、西洋人のそれをモデルとし、キリスト教を背景として培われてきた文化の影響を強く受けているが、日本人の自我のあり方はそれとは異なる特徴を持つという立場から、「漂泊自我」という概念を提出している。以下、老松の論を検討する。

西洋においては、神の似姿として創られた人間の自我は、自らの立場・規範に中心的な価値を置き、それを変わることのない基準とする一貫したあり方を生きることや、自他の違い、境目を明らかにすることを大切にする。ここでの自我は、意識というフィールドの中心に位置するものとしてイメージされる。

一方、日本人の自我は、意識の中心に留まることなく、フィールドの内部とその周辺を移動し続けるために、自我と意識内の諸内容との関係は相対的なものとなる。そのためこの自我は、その関心が今現在の関係に集中していること、その都度出会う「外なるもの」が自我のあり方の多くを規定するほどの影響力を持って強く意識されていることを特徴とすることになる。この「外なるもの」は、従来自我として見られたことはなかったが、それを自我の一部として把握し直すことで、自我の視野がきわめて広くなる。

漂泊自我はその都度の出逢いと別れの関係を生きているが、それは、常に移ろいゆく諸々のものごとの間の関係の網の目である縁という、より大きな力への信頼に基づくあり方である。それは、「一点に根を張らぬが、世界全体に地下茎のごとくに延びる根を張っていて、その網の目のどこからでもひょいと地上に顔をのぞかせるのだ。そしてまたその根は、いわゆる無意識の深層のなかへも張りめぐらされている」というあり方である。こうした関係の持ち方のために、漂泊自我のあり方は非連続的となるが、他方では縁という遍在するネットワークへの信頼に基づいた存在の場をもつという遍在性も備えている。この点で漂泊自我は、常に一定の居場所を持つ西洋的な自我と正反対のようでありながらも近く、自我のあり方は、西洋的な自我のあり方と日本的な漂泊自我のあり方を両極としたスペクトルとして考えられるという。

漂泊自我と＜わたし＞の最も重要な共通点は、従来の自我の外側にあったものを、その一部として捉えることで、両者が自我の外部・他者との繋がりや拡がりをもった一種のネットワークとして考えられるようになることである。また、その都度の出逢い・別れや今現在意識しているものとの関係が、漂泊自我と＜わたし＞のあり方に大きな影響力を持っているために、関係や場が変わると、両者のあり方も変わってくると考えられることも共通している。これらのことによって、漂泊自我や＜わたし＞は、拡がりのある視野を獲得し、内なる規範だけでなく、その都度の関係や場にも大きな価値を見出して判断するという、柔軟なあり方と繋がってゆく。これは、従来の西洋的な自我が一貫性を重視し、内なる規範に最大の価値をおいて判断するのと対照的である。

ただし、老松（1997）においては、「外なるもの」は「外の視点」、「外という現実に近接した領域」と表現されるに留まっている。意識のフィールドとその周辺を移動し続けるという漂泊自我の特性のために、「外なるもの」にも広がりやゆとりを持たせているのだとも考えられるが、やはりその意味する所にやや曖昧さが残っているように思われる。＜わたし＞においては、外なる他者は、物理的な意味という水準では繋がりのない他者であるが、それと同時に、より拡大されたその人にとっての意味という水準では繋がりを持った他者でもあると考えている。ある瞬間における体験としては、この物理的・現実的な意味の水準と、その人

にとっての意味の水準は分かれておらず、他者はそこでは二重に体験されていると考えられる。この他者の水準の二重性は、のちの老松（2010）による健康な二重見当識と重なる所がある。一般な意味での二重見当識とは、「精神病者などが、一方で自身の非日常的な病的体験に断固たる確信を抱いていながら、同時に現実の日常的なものごとに対する常識的な考えも持ち合わせているかに見える状態」である。しかし、肯定的・健康的な意味での二重見当識は、「現実のリアリティと象徴のリアリティをどちらも大切にし、一方のために他方を犠牲にすることなく生きていくための試み」であり、「現実のなかに象徴を見て、象徴のなかに現実を見る」という二つの捉え方の間における不断の往還であるという。そこでの経験は「ほんものよりもほんものらしい」リアリティをもってその人のこころに影響を及ぼす（老松 2010, 14頁）。この健康な二重見当識の観点から見れば、＜わたし＞はその人にとって非常なリアリティをもって体験されると考えられる。老松自身は、漂泊自我における「外なるもの」と健康な二重見当識との繋がりについて述べていない。そのため、＜わたし＞という意識は、漂泊自我の概念では十分に検討されていなかった部分を明確にするものだと言えるだろう。

2－2　あいだ・自己・主体

ここまでで、臨床心理学者から見た日本的な自我について検討してきた。次に、精神病理学者の分野から木村敏に登場してもらおう。木村敏は、日本人の自己のあり方の本質を「あいだ」という概念で捉え、その精神病理学の柱としている。異なる領域ではあるが、筆者の考える＜わたし＞と似ている所があり、参考になるので、ここで取り上げてみる。

木村（1987）によると、西洋-キリスト教圏においては、隣人愛という他者との関係も、直接ある人からある人へ愛情が行くのではなく、一度神を経由して相手に向かうという。そこでは個人はその中心部において天上の神と直接に結ばれており、何かを判断する際には、他者ではなく、この神自身あるいは神と結ばれた個人の中心部をその判断基準としている。それ故、自己は主体として、客体である他者と明確に分離・独立したものとして扱われることになる。すなわち、西洋における自己の本質は、その内部性と主客の明確な分離・独立性にあると考えられる。一方、日本人の場合、自己というべきものや規範は、個人の内部にではなく、個人の外側、すなわち相手との間に出てしまっているという。そして、この他者との関係、間柄によって、その人のあり方も変わってくる。つまり、そこでは自己が主客の明確な分離・独立の中で成り立っているのではなくて、他者との「あいだ」と不即不離の関係において成り立っている。この点で木村の考える自己や「あいだ」の概念は、＜わたし＞が他者や他者との関係も含んだものであることと共通している。

また、木村（1988）は、Weizsäcker, V.の「主体」の概念と関連づけながら「あいだ」の性質について述べている。Weizsäckerの主体とは、生きものがその生命の根拠にかかわっている関係のことである。それは、生きものが環境と出会っている限りで成立しているため、この出会いが何らかの事情で壊れると、主体も消滅する。しかし、生きものが生きている限り、新しい別の出会いが生じ、新しい主体が誕生する。このような主体が消滅する危機的な転機（Krise）こそは、そこで絶えず新しく生み出される主体の存在を見極める絶好の機会であり、人間関係に転機が訪れるたびに、個人はその都度新たな出会いを樹立し、主体を維持するという。ところで、鷲田（1999）によれば、各人にとっては自分が誰の他者でありえているかの感覚が、自己の同一性の感情の核をなすというが、他者と関わることが、私が＜わたし＞としてあるための条件となっていると考えられる。そして、この私と他者の関係が、Weizsäckerの主体ということになる。そして、この主体は不断の転機による断絶にもかかわらず全体としては連続性やまとまりを保っているという。＜わたし＞においても、その都度意識されている事柄や関係は刻一刻と変化していながら、全体としての歴史性や

まとまりは保たれている。すなわち、＜わたし＞は、その関係に転機の訪れるたびに、脱構成と再構成とによる更新を繰り返しながら、それでも絶えず＜わたし＞であるという歴史性によって維持されていると考えられる。この＜わたし＞は関係のネットワークの中に潜在的な可能性としてあって、その都度の他者との関わりの中において経験可能なものとして浮上してくる形で成立しては解消されるということを繰り返していると考えられる。

2－3　西洋における自我・自己と治療論

先述のように、西洋的な自我、自己というものにいては、明確な主客の分離・独立が前提とされ、自身の立場に中心的な価値を置き、その一貫性、明晰さ、明確さが重視されている。そうした文化の中で生まれた心理療法では、クライエントが感じ、訴えているものは、実際の外界や他者の姿というよりは、本来そのクライエント自身に属するものとして捉えようとする傾向が強い。そのため、精神分析的なアプローチのように、クライエントが外界や他者に投影していた内的世界、主観的なものを理解して引き戻すこと、それらを外的世界、客観的な現実とは異なるこころの中のこととして考えられるようになること、あるいは認知行動療法のように、主観的な認知が客観的な現実とは異なったものであることを共に確認し、より現実的な捉え方や振る舞いができるようになることが目指されるようになるのは自然なことだろう。

ここで､自我や自己というものに対する西洋的な理解やそれに基づく心理療法のアプローチを､＜わたし＞という意識や、自我や自己に対する日本的な理解の比較として持ち出したのは、それらを否定するためではない。むしろ、わたしというものに対する日本的な理解と西洋的な理解は、大きく違う前提からそれぞれの方向に向けて出発したにもかかわらず、多くの先人たちによって臨床実践や研究が積み重ねられ、理解が進むうちに、実は両者がその基本的な理解のところで意外なほど近づいているのではないかと筆者は考えている。それはちょうど、違う場所から山に登り始め、それぞれの登山道を進んでゆくと、道中の景色は違っていても、最後は同じ山頂に辿りつくことに似ている。そして、＜わたし＞という視点によって、その歩み寄りに僅かばかりではあるが貢献することが出来るのではないかとも考えている。

以下では、自我や自己といった、わたしというものに対する理解からその理論構築がなされている精神分析の考え方を参照し、＜わたし＞における理解との異同を検討する。その後、わたしというもののあり方について、明確な主客の分離に基づいた理解というよりは、関係に基づいた理解を採用しているように思われるJung派について見てゆく。

2－3－1　精神分析学派における転移理解

精神分析の歴史において、治療関係は、「治療者がクライエントの病理性を一方的に査定し、そこに介入してゆくという外科治療的な関係ではなく、治療者とクライエントの双方からのコミュニケーションが行き来する相互交流の関係として理解され」るようになったという（松木 1998, 77頁）。ここには、セラピストとクライエントの関係がはっきりと分離、独立したものであるという理解から、その場における関係に基づいてクライエントのあり方を捉える理解へと近づいている。

松木（1998）においては、転移とは、「内的体験での不安や情緒にかぎらず、思考・心的機制・対象関係といったあらゆるコンステレーションが、多くのばあいはストーリー性をもって治療者とのあいだに表出され、再演されること（松木 1998, 80頁）」とされ、それらは「分析セッティングの中のあらゆる事柄（たとえば言葉・物・ふるまい・空気）をとおして、治療者にからみついてくる」という。そして、治療者が転移に絡め取られることを通して初めて、クライエントともに、転移されているクライエントの内的世界を生き

ることができると、治療の場における関係の理解を示している。ここでは、治療の場で生じている現象はクライエントの内的世界の現れであるという理解に相当の比重が置かれているものの、面接空間内のあらゆる事柄の布置がクライエントの体験の場を構成しているという理解とも重なる部分があるように思われる。

また、松木（1998）は、現実関係を見ていく視点も併せもつ複眼視をしてゆきつつ、『すべてが転移である』という視点を絶やすことなく、いま展開している治療を味わう必要があるとも述べており、セラピストは臨床実践において、現実的な意味の水準と、その人にとっての意味の水準を同時に見る視点を持ち合わせている必要があることが窺える

2－3－2　精神分析学派　Symingtonのライフ・ギバー

Symington, N.（1993/2007）は、自己は元来他者的なものであり、自己の存在はもう一人の他者との関係の中で成立するという。そこでは、他者との関係の中にある自己の部分を客体と、もう片方の部分を主体と呼ぶとして、主体と客体は互いに独立して存在できないことを指摘し、ライフ・ギバーという概念を導入してナルシシズムの成立を捉えた。ライフ・ギバーとは、私自身と他者を共に含む現実のこと、あるいは、心が非常に深い水準で選ぶことも拒むこともできるような精神的対象であり、選択されて始めてその存在を得るようなものだという。ライフ・ギバーは、外的な他者であると同時に、内的な対象でもあり、愛の対象としてこれを選ぶ代わりに、自分自身を愛の対象とすることでナルシシズムの状態になるという。この概念のもう一つの特徴は、自己のあり方に対する環境や内的不安の影響を認めつつ、それに対する反応は個人の選択も大きく反映されているという志向性・選択性を考慮していることである。

ライフ・ギバーは、主客が互いに関連しあって存在しており、他者との関係が自己を成立させる条件として捉えられている点で、わたしというものに対する日本的な理解と共通点を持っている。また、内外の事柄に対する自我の選択が考慮されている点で、先に述べた筆者の理解とも近い。一方、この概念では、他者それ自身と、他者との関係とを十分に区別していないため、そこで動いている関係に対する自我の関わり方や選択というものを考えにくい点で物足りなさが残る。

2－3－3　Jung派の立場から

Jung派では、意識の拡大ということが重視されており、Jungのことばによれば、「意識という用語で私が理解しているのは、こころの内容の、自我に対する関係である。ただし、この関係が自我によって知覚されているかぎりでの関係を指し、自我に知覚されていないこころの内容と自我の関係は無意識である。意識とは、こころの内容と自我との関係を維持しようと働く機能のことである（CW6, para. 700）」（Samuels, A et al. 1986/1993, 9頁）。つまり、意識の拡大とは、自我がより多くのこころの内容と自我の関係を捉えようとすることであると考えられる。

また、Jung派においては、自我に対するこころの内容の自律性・客体性を認めているため、こころの諸内容は自我にとって内なる自律的な他者といえる。自我とこれらの関係、特にこころの諸内容の中心であるセルフとの関係について、Jung自身は「自我と自己（注１）との関係は、運動体に対する動因、客体に対する主体の関係と同じだ」（CW11, para.391）と述べ、自我とセルフはそれぞれ相手を必要とすることを認めている（Samuels, A. et al. 1986/1993, 64頁）。つまり、自我もこころの諸内容もそれ単独では潜在的な可能性の状態に留まっているが、それらが関係を持つことで意識の場が成立するのである。そして、Jung派の観点では、この意識の場において自我に経験可能なものとしての元型が布置され、癒しの可能性が開かれるのだと考えられる。

Freudがこころを意識と無意識（個人的無意識）とに分けたのに対し、Jungはさらに集合的無意識を仮定した。Jung（1936／1999）によれば、「個人的無意識が、一度は意識されながら、忘れられたり抑圧されたために意識から消え去った内容から成り立っているのに対して、集合的無意識の内容は一度も意識されたことがなく、それゆえ決して個人的に獲得されたものではな」い（Jung 1936／1999, 12頁）。そして、集合的無意識は元型によって構成されているという。元型とは、特定の要件が揃った状況における行動の引き金や基礎となる、こころに先天的に備わった振る舞いのパターンのことである。それは「比較的自由な意志によって制限されてはじめてその絶対性を失う」（Jung 1946／1999, 333頁）という。元型はパターン・形式であるため、それ自体では捉えることのできない潜在的な可能性に留まっている。しかし、こころの諸要素がある特定の状況を布置した際に、こころはそれに対応した振る舞いを示し、これらと自我が関係を持つことで、＜わたし＞という意識の場において、潜在的な可能性が経験可能なものとして現われてくると考えられる。このとき、元型的なものが癒しをもたらすのは、その両極性に支えられた強い感情価を伴った駆動力としての体験によると考えられる（Jung 1946／1999　老松 2016）。例えば、老松（2016）によれば、それまで否定的な母親しか体験したことのない人が、セラピーに訪れ、その恨みや絶望がどん底にまで達した時に、夢に慈母が登場し、現実では一度も経験したことがない母親の優しさに生まれてはじめて触れるという体験をすることで、それまでの見方が一瞬にして反転することがある。そして、「それをきっかけに、彼の思いは、語られることのなかった母親自身の深い傷や悲しみへと向きはじめるのである。内なる母親の悲しみと彼自身の悲しみが不思議に重なって、激しい恨みは鳴りを潜め、もはや互いに赦し赦されるほかはなくなっていく」。そこでは、「常識的には相容れないと思われる否定的な側面と、肯定的側面とが一つになる」という（老松 2016, 27-28頁）。自我の力だけでこうした癒しを起こすことはできないが、しかし、その潜在的な可能性が形となる場を整えるのはセラピストの仕事なのではないだろうか。

Jung派においては、こうした人間の力ではどうにもならない力は「内なる他者」であるという理解（林 1999）がなされることが多いようだが、筆者としては、Jung派においても用いられているウーヌス・ムンドゥスという観念を援用することで、無意識の指す領域を内なる他者に限定してしまわず、外なる他者にまで拡大し、それと自我を関係付けることが出来ると思われる。ウーヌス・ムンドゥス（一なる世界）とは、個々別々の諸部分を調和させる超越的ないし上位的な計画があり、存在の各々の層は他のすべての層と密接に繋がっているという、ニュートン以前の観念である。その焦点は物事自体ではなく、物事同士の関係、更にはそういった諸関係同士の関係に向けられる（Samuels, A et al. 1986/1993）。超越的なものや神話的なものが実際に存在するかはここでは問題ではない。重要なのはむしろ、自我や「自己」の外側にあるものとの関係が、自我にとって「ほんものよりもほんものらしい」経験が生じうるという場を開くということであり、そこでは物理的・現実的な意味の水準と、その人にとっての意味の水準が重なっている。＜わたし＞ということばで捉えようとしているのは、この関係の場である。

3. 非対称な関係のなかで＜わたし＞意識をどう理解するか

以上、自我や自己に関する理論と＜わたし＞概念の比較検討を行い、＜わたし＞の特徴について述べてきた。次の課題は、臨床の場において＜わたし＞をどのように捉えられるかについて述べることだと思われる。

多くの日常的な関係においては、関わっている二人の人は自身のことを伝え合い、お互いに相手のことをほぼ同じくらいに知っていると考えられる。これに対して、心理臨床においては、セラピストは基本的には自分自身のことを話さず、クライエントが自身のことを話し、セラピストがそれを聴くということが殆どで

ある。つまり、心理臨床における対人関係は、非対称な関係であり、そこではクライエントとセラピストそれぞれが求められる事柄が違ってくる。

まず、セラピストに関して言えば、依拠している理論によって、クライエントへの関わり方や介入の仕方、その量や程度は異なるだろうが、クライエントの援助、すなわち、そのクライエント本人のこころの動きや振る舞いを大切にし、その自発性がどのように現われ、変化してゆくのかを見守るという所においては共通していると思われる。クライエントは、その生活世界において様々な他者や物事と関わり、面接空間においてはセラピストや面接室内の物と関わる中で様々な体験をする。セラピストはそうしたクライエントの語りに耳を傾け、あるいはその体験を共にする。このとき重要なのは、そのように語っているクライエントが置かれている様々な関係の拡がり―＜わたし＞として表現してきたもの―をセラピストが意識して、その動きを注意深く見守っていることだろう。つまり、セラピストが根幹の部分において求められるのは、クライエントの＜わたし＞を見守ることであると考えられる。

見守り手としてのセラピストは、見守るというあり方でクライエントの自我との関係を結ぶのだが、それはすなわち、＜わたし＞という意識や経験の場を生成するための条件でもある。見守り手の存在によって成立し、維持される＜わたし＞という意識や経験の場は、実際には自我と見守り手だけの関係ではなく、様々なものごとやそれらとの関係も含んでおり、自律的で、潜在的な可能性を孕んでいる。この自立的で潜在的な可能性を孕んだ関係が成立するということは、Jung派的に言えば、そこに元型が布置されるということであり、先の松木の言葉を借りれば、あらゆるコンステレーションがストーリー性を持ってセラピストとのあいだに再演されるということだろう。

セラピストが見守るという関係をもつことの意味は、この＜わたし＞という場を整えることにあるのではないだろうか。見守る／見守られるという関係を通して、クライエントとセラピストが置かれている関係に潜在的な力や可能性が具体的な形を取って現れてくると考えられる。セラピストの仕事において、「待つことが重要」とされているのは、この関係に潜在的な力やパターンが現れてくることに対してだと筆者は考えている。

こうした自律的・潜在的な可能性をセラピーに生かすためには、そうしたものが動いている兆候を見逃さず、現われたまさにそのときに捕まえることが必要だろう。そのためには、セラピストが、本論において＜わたし＞と表現しているような視点をもち、クライエントが置かれている様々な関係や可能性に対して開かれていることが重要と考えられる。また、セラピストとクライエントの関係がそうしたものに開かれていることで、クライエントの方からも自発的に様々な可能性を面接の場に持ち込むことが出来るはずである。Jung（1967／1987）によれば、元型的イメージがどれだけ心に影響を与えるかは個人の心の構えによって決まるという。そのため、面接の場、あるいはセラピストとクライエントの関係がそうしたものへどの程度開かれているかということ―親和性といっても良いかもしれない―は、セラピスト自身が、これまでどのような経験をしてきたか、面接の場において今、何を意識しているかということによっても、大きな影響を受けると考えられる。それゆえ、セラピスト自身も、自らの歴史や経験、その場で動いている様々なものや可能性―すなわちセラピストの＜わたし＞―にも目を向けておくことは意味があると思われる。

また、同様に、クライエントの側においても、これまでどのような経験をしてきたかということが、面接の場やセラピストとの関係をどのように体験するかということを大きく方向付ける。あるいは、関係の中で生じている事柄や動いているものを捉えることの得意不得意ということもあるだろう。

例えば、境界例と言われる（自己愛に深い傷を抱える）人々は、幼少期からの養育者との間で、手放しで安心して認められる経験が非常に少なく、そのために、安心という感覚あるいは、安心できる関係というも

のを体験する素地が十分に形成されていないことが多い。それ自体が病理の元であるのだが、セラピストとの治療関係が、存在の根拠のようなものに開かれ、それを自身の癒しに利用してゆくことを難しくもする。ときに否定的に受け取ってしまい、残念ながら、その傷付きを一層深めてゆくこともある。

また、一般に他者との関係性や振る舞いの中で仄めかされる態度を捉えることが苦手とされる発達障害の人々について言えば、今その場でのセラピスト-クライエント関係において明言することが難しいために態度という形で示されるものに対して、例えば「はっきりと言われなかった」という理由で、それをうまく受け取れないということがある。その一方で、彼らの中には、他者とのあいだで動いているものに対して非常に鋭敏なセンス・直観力とでもいうべきものを持っている人達もいる。彼らは生活世界の中や面接の中で生じる偶然にも思える出来事の中に彼らのとっての重要な意味を発見し、それを自らのものとして力を付けてゆくことがしばしばある。

ただ、＜わたし＞というものやそこで動いている潜在的な可能性に開かれている必要があるとは言っても、クライエントの場合には、＜わたし＞という意識を言語化できるレベルで理解することは必ずしも期待されないように思われる。セラピストは適切な関与のためには、クライエントよりも広く、あるいは少し先を理解・意識しておく必要があるので、ある程度言葉にできることが求められるかもしれないが、クライエントにおいては、むしろ、＜わたし＞ということばで表現している、自我よりも大きなもの、あるいは、自分が自分であるために依拠している関係、存在の根拠のようなものに触れるような体験をすることが重要だと思われる。そこにおいて、潜在的な可能性が関係の場を通してクライエントに経験されると考えられる。体験の影響力に関して言えば、トラウマのような体験は、それが十分に言語化できないとしても、あるいは言葉に収まらないものだからこそ、その人にとって体験のあり方自体を大きく変えてしまうということを思い浮かべてもらえばよいだろう。

おわりに

以上、セラピストの支援観・治療観の根底には、わたしというものをどのように捉えているかということがあるという問題意識から、自我、「自己」、＜わたし＞という捉え方を提示し、先行理論との比較を通して＜わたし＞の特徴について論じてきた。先行理論と＜わたし＞は重なる部分も多いが、先行理論では十分に扱われていなかった領域である外なる他者を明確にその内に含めた点において異なっていると考えられる。

＜わたし＞においては、現実的な意味の水準とその人にとっての意味の水準とが重なって体験されているが、こうした二重の意識に関して老松（2010）は、「無意識的な二重見当識はきわめて不健康だが、意識的な二重見当識は、深みを探求しようとする自我にとってきわめて強力な守りとして機能する（老松 2010, 15頁）」と述べている。セラピストが自覚的に＜わたし＞という理解をもっていることで、安全のうちに、外なる他者との出会い・関わり、あるいは外なる他者の存在自体が、潜在的な癒しの可能性として捉えられると思われる。

本論においては、プライバシーの問題もあって臨床事例を提示することはできなかった。そのため、事例の考察を通した＜わたし＞概念の検討は今後の課題としたい。

注

(1) JungのSelfの概念は、訳者によって「自己」、「セルフ」と訳し方が異なるが、本論では混乱を避けるために本箇所の引用以外では「セルフ」で統一する。

謝辞

本論文の執筆に当たり、指導教員の老松克博教授には、ご多忙な中、貴重なご助言を頂き、大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

引用文献

木村　敏　1987 「人と人のあいだの病理」河合文化教育研究所.
木村　敏　1988 「あいだ」『木村敏著作集６―反科学的主体論の歩み』弘文堂　2001, 123-235頁.
Jung, C, G. 1921, 林　道義訳『タイプ論』みすず書房　1987.
Jung, C, G. 1936, 林　道義訳「集合的無意識の概念」『元型論［増補改訂版］』紀伊國屋書店　1999.
Jung, C, G. 1946, 林　道義訳「心の本質についての理論的考察」『元型論［増補改訂版］』紀伊國屋書店　1999.
松木邦裕　1998 「すべてが転移／逆転移……ではないにしても」氏原　寛・成田善弘編『転移／逆転移―臨床の現場から』人文書院, 69-87頁.
老松克博　1997 『漂泊する自我―日本的意識のフィールドワーク』新曜社.
老松克博　2010 「二重見当識のあわいで―訳者解説にかえて」 Blavatsky, H. P. 1877, 老松克博訳『ベールをとったイシス　第１巻　科学　上』竜王文庫　2010.
老松克博　2016 『身体系個性化の深層心理学―あるアスリートのプロセスと対座する』遠見書房.
Samuels, A. Shorter, Bani. Plaut, F. 1986, 山中康裕監修　濱野清志・垂谷茂弘訳『ユング心理学辞典』創元社 1993.
Symington, N. 1993, 成田善弘監訳　北村婦美・北村隆人訳『臨床におけるナルシシズム―新たな理論』創元社 2007.
鷲田清一　1999 『「聴く」ことの力―臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ.

Expanding the concept of "self" in clinical psychology – ego and "self" into 〈I〉 –

NINOMIYA Koudai

In psychotherapy, how a therapist supports or treats clients essentially stems from the former's understanding of "self". This report, at first, defines the concept of "self" as that which includes the ego, the inner others and their relations; and the concept of 〈I〉 as the consciousness or the field of experience that includes "self", the outer others and their relations. Subsequently, by comparing the concept of 〈I〉 to previous researches on ego and "self", the essences of 〈I〉 are proposed as follows. In the field of 〈I〉, a person experiences the objective and the subjective meanings simultaneously, similar to the phenomenon of "double orientation". In addition, every time "Krise" – a critical turning point- comes to the relation that he/she and his/her inner or outer others live on, the 〈I〉 repeats its own deconstruction and reconstruction. Moreover, the 〈I〉 is the field that enables the experience of the manifestation of the potential healing. Finally, the support or treatment of clients requests therapists to be open to the consciousness of 〈I〉, create the field of 〈I〉 for clients, and witness clients' 〈I〉. For clients, it is important to experience something greater than the ego, or experience the relation that he/she lives on.

Key words: 〈I〉; relation; outer others